



学生セツルメントおよびワークキャンプに関する研究の課題と展望 : ボランティアの学びに注目して

堤, 拓也

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 15(2):39-51

(Issue Date)

2022-03-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81013201>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81013201>



学生セツルメントおよびワークキャンプに関する研究の課題と展望 —ボランティアの学びに注目して—

Issues and Perspectives of Studies on Student Settlements and Workcamps : Focusing on Learning Theories in Volunteer Activities

堤 拓也*

Takuya TSUTSUMI *

要約：本稿では、ボランティアにおける学びを、教育的意図の有無に関わらず、ボランティア活動を機軸として生まれるあらゆる学習を包括する概念として捉え、学生セツルメントおよびワークキャンプの先行研究を、学びの観点から整理する。この作業を通して、両者の学習論上の類似性を指摘するとともに、今後の研究課題と展望を明らかにする。まず、両者に類似する学びの特徴として、第一に、地域および社会の課題について頭で考えるだけでなく、具体的な活動から掴んでいこうとするプロセス、第二に、学生自身が様々な悩みや葛藤を伴いながら主体形成を遂げていくプロセスが重視されていたという特徴が見出された。次に、ボランティア活動参加者が様々な悩みや葛藤を経験しながら自己を形成していく学びのあり方を〈ゆらぎ〉の学習論として捉え、今後の研究課題と展望を以下の三点に整理した。一点目は、戦前・戦後の学生ボランティア活動における学びがその後の人生にどのような影響を与えたのかという観点からの分析の必要性、二点目は、ボランティア活動における参加者の〈ゆらぎ〉を観点とした実証研究の必要性、三点目は、ボランティア活動における学びを、長期的なものとして捉え、活動後の多様な経験や出来事の影響をも視野に入れた総体として探究する必要性である。

キーワード：ボランティア、サービス・ラーニング、学生セツルメント、ワークキャンプ、ゆらぎ

1. はじめに

地球環境、経済、社会全般に関わる総合的な問題解決およびその主体形成が求められる現代において、改めて、ボランティア活動における学び¹⁾への期待が高まっている²⁾。特に、教室内の学習と教室外のボランティア活動を連関させた教育方法はサービス・ラーニングと呼ばれ、地域の問題解決とともに、その背景にある社会問題への気づき(「省察 reflection」)および協働的な問題解決の手法と態度(「互惠 reciprocity」)を得る方法として高等教育機関を中心に組み込まれている(Jacoby, 1996)。

しかし、ボランティア活動における学びは多様である。そこでの経験はサービス・ラーニングとして意図的に構造化される前に、学習者にとって何らかの意味を持つものであり、そこに学びの契機は存在する。すなわち、サービス・ラーニングにおける学びを実質化していくには「省察」「互惠」の要素を一連の学習活動に組み込むとともに、ボランティア

活動そのものの内容、実施形態およびそこでの学びのあり様について整理する必要がある。

これまで、多種多様なボランティア活動の中でも、参加者の学びについて様々に論じられてきた活動として、学生セツルメントおよびワークキャンプと呼ばれる活動がある。学生セツルメントおよびワークキャンプは、ともにボランティア活動の源流とされる活動であり、特に、戦後日本において、多くの学生がこれらの活動に参加し、ボランティア活動の型を継承してきた³⁾。しかし、それらの先行研究は十分に整理されているとはいえず、両者の類似性についても十分に検討されているとはいえない⁴⁾。

1960年代の興隆期と比べれば、その総数は減少していると推察されるが、現代においてもいくつかの団体においてワークキャンプは実施されている⁵⁾。また、学生セツルメントについてもその精神を受け継いだ活動が展開されている⁶⁾。ボランティア活動の源流とされるこれらの活動がこれまでどのように

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士課程後期課程

(2021年10月7日 受付)
(2022年1月24日 受理)

論じられてきたのか、とりわけ、そこでの学びについてどのような観点から論じられてきたのか、また、そこでどのようなことが課題とされてきたのかを整理することは、現代のボランティア活動およびそこでの学びのあり方を考究する上で重要な課題だと考えられる。

本稿では、学生セツルメントおよびワークキャンプの先行研究をボランティア活動における学びの観点から整理する。この作業を通して、両者の学習論上の類似性を指摘するとともに、今後の研究課題と展望を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究の収集および整理方法

学生セツルメントの先行研究の収集にあたりデータベースは CiNii Articles・Dissertations。検索式は(学生セツルメント OR 学生セツルメント OR 大学セツルメント OR 大学セツルメント OR 帝大セツルメント OR 帝大セツルメント OR 東大セツルメント OR 東大セツルメント)としてタイトル検索。1956年から2020年の論文を収集した。本稿では、国内の学生セツルメントに関する先行研究をレビューの対象としたため、包含基準は、国内の学生セツルメントを対象とした論文。除外基準は、国内の学生セツルメントに関する論文の中でも、①「託児部」や「法律相談部」といった特定のパートに焦点化し、その活動内容や意義について述べられた論文、②特定の人物史について論じられた論文とした。なお、CiNii Articlesには『日本福祉大学研究紀要』がVol.2からのみ登録されているが、Vol.1に掲載されている論文も重要な先行研究と考え、レビューの対象に加えた。

検索の結果、得られた論文数は41件(重複除く)。包含基準に合致するものは31件。そこから除外基準に基づき14件の論文を選定し、『日本福祉大学研究紀要』Vol.1に掲載の1論文も加えた15件の論文をレビューの対象とした。なお、論文が後に改稿され、博士論文や学術書となっている場合には、改稿後のものをレビュー対象とした。本稿におけるレビュー対象は以下のとおりである。

<学生セツルメントに関する研究> (出版年順)

- ・「学生セツルメント運動の理解と課題について」(北川, 1956)
- ・「戦前における学生セツルメントの性格について」(高島, 1957)
- ・「日本学生セツルメント運動の研究」『日本セツルメント研究序説』(西内, 1959, p.51-65)
- ・「学生セツルメントの動向」(高島, 1968)
- ・「帝大セツルメントに関する一考察」(山田, 2012a)
- ・「亀有セツルメントの創生期—帝大セツルメント

から東大セツルメントへの歴史において」(山田, 2012b)

- ・「大学における社会貢献活動支援の意義について—大学セツルメントの歴史から見いだすもの」(中村, 2014)
- ・「大学セツルメント活動が地域に果たした役割—日本女子大学O町セツルメントの事例から」(黒岩, 2015)
- ・「学生セツルメントに関する資料を読むために」(山田, 2015)
- ・「関東大震災を契機として始まった東京帝国大学セツルメント—世代間交流の視点からの再検討と現代学生ボランティアとの関連性」(佐々木・草野, 2018)
- ・「戦後九州大学セツルメントの活動と学生意識—1950年代後半、再建期を中心に」(赤司, 2020)
- ・「戦後学生セツルメントの展開に関する研究」(岡本, 2020)

ワークキャンプの先行研究の収集についてもデータベースは CiNii Articles・Dissertations を用いた。検索式を(ワークキャンプ)としてタイトル検索を行い、1951年から2020年の論文を収集した。包含基準は、国内の学生を対象としたワークキャンプに関する論文。除外基準は、①「報告書」や「活動記録」のように特定の実践報告や感想文を主としたもの、②学会・大学等の紀要ではなく一般雑誌に掲載されているものとした。なお、『承認欲望の社会変革—ワークキャンプにみる若者の連帯技法』(西尾・日下・山口, 2015)および『ボランティア・市民活動実践論』(ボランティアセンター支援機構おさか編, 2019)という書籍中にも重要な論考が収められていたためレビューの対象に加えた。

検索の結果、得られた論文数は80件(重複除く)であった。そこから除外基準に基づき12件の論文を選定し、先程の書籍を加えた以下の15件の論文・書籍をレビュー対象とした。

<ワークキャンプに関する研究> (出版年順)

- ・「青少年の内的欲求に応える福祉教育—ボランティア・ワークキャンプの自己評価に対する影響をめぐって」(高野, 1982)
- ・「ボランティア学習プログラムにおける支援者の役割—大阪ボランティア協会『高校生ワークキャンプ』の実践事例をとおして」(名賀, 2004)
- ・「スリランカにおけるサルボダヤ運動とその地域開発の手法—ワークキャンプの可能性と意義を求めて」(古橋, 2004)
- ・「桃山学院大学における国際ワークキャンプの課題と展望」(林, 2007)
- ・「ワークキャンプの評価視点についての基本的枠

組みに関する考察—ワークキャンプの歴史的経緯と調査研究に基づく有効性の検証をもとに」(佐藤, 2006)

- ・「実践者が自らの実践を問うための研究方法—福祉教育実践としてのワークキャンプから」(佐藤, 2010)
- ・「いのちの持続性とワークキャンプ運動—いのちの持続性を観点としたワークキャンプ実践分析」(名賀, 2014)
- ・『承認欲望の社会変革—ワークキャンプにみる若者の連帯技法』(西尾・日下・山口, 2015)
- ・「ボランティア活動実践にある学びとプログラムの関係—ワークキャンプを事例として考える」(名賀, 2016)
- ・「社会理論と事例研究の間で『生の技法を分析する』—『ボランティア』とワークキャンプ」(山口, 2016)
- ・「福祉教育実践プログラム『ワークキャンプ』の有用性について」(佐藤, 2018)
- ・「ワークキャンプ実践に見る福祉教育そしてボランティア学習」(名賀, 2019)『ボランティア・市民活動実践論』(ボランティアセンター支援機構おおさか編, 2019, p.225-242)
- ・「持続可能な共生社会の創造に資するボランティア実践の意義と課題—〈いのちの持続性〉を問う価値枠に着目して」(松岡, 2019)『ボランティア・市民活動実践論』(ボランティアセンター支援機構おおさか編, 2019, p.141-156)
- ・「短期海外ボランティアによる主観的成長と『社会人基礎力』—ワークキャンプ型とホームステイ型の違いに着目して」(小菅, 2020)
- ・「災害ワークキャンプが作ったもの—住民からみた『唐桑キャンプ』」(山口, 2020)

3. 学生セツルメントに関する研究

学生セツルメントに関する先行研究は、戦後の学生セツルメント興隆期であった1950-60年代の最中に出版されたものと、2010年代以降、その意義を再評価しようとした研究に大別される。1950-60年代の先行研究は、当時、学生セツルメントがどのように捉えられていたのかを知る上で重要だと考えられる。まずは、1950-60年代に出版された先行研究について概観していく。

3-1. 学生セツルメントに関する1950-60年代の研究—理論と実践の往還を通じた学びと主体形成

戦後活躍した社会福祉学者である高島進は、帝大セツルメントの特徴として、「帝大セツルメントは、一般のセツルメントとはことなり、学生運動の中から生れたのであり、社会運動の一環であった」(高島,

1957, p.17) と述べ、「その底を一貫して流れているものは、いわゆる無産大衆の『自治的精神』、自主性への深い信頼であり、その育成の努力である」(高島, 1957, p.29) として、その社会運動的側面を取り上げた。高島が帝大セツルメントの時勢に立ち向かう事業展開をあとづけたように、当時のセツラーは、戦前のファシズムの中で、労働者のエンパワメントを志向した事業を展開し、その過程で様々な衝突や葛藤を経験していたと考えられる。また、戦前の学生セツルメントが、大学拡張の理念のもと、理論と実践の往還に活動の重点をおいていたという点は、現代のサービス・ラーニングにも通ずる点である。こうした戦前の「帝大セツルメント」の精神は戦後にも引き継がれることとなる。

戦後の労働社会学者である北川隆吉は、戦前・戦後の学生セツルメントの共通点として、第一に、「知識によって、(適当な表現ではないが媒介として)市民、農民、労働者との連携をつよめ、科学の私物化、御用化、象牙の塔化を排除すること、その現実への適用と検証を根底にもっている」(北川, 1958, p.13)、第二に、「知識という武器によって貧困、社会的教育不平等、戦争及び平和のわが国における基本的問題ととりくみ、しかも消すことのできぬヒューマニズムによって各個のセツラーが支えられている」(北川, 1958, p.13)、第三に、「各セツラーが民主主義的討議によって、自主的に運営に参加し、国家権力その他の政治力に左右されず少なくとも健康にして文化的な社会を指向し、行動すること(地元の人たちをふくめて)によって結ばれている」(北川, 1958, p.13) 点を挙げた。さらに、北川は、戦後の学生セツルメントの特徴として「戦前は所謂『抵抗』としての意味をもったのに対して、戦後では積極的行動、創造的側面をもつという運動の方向に大きな差が生まれたと考える」(北川, 1958, p.13) と考察した。

また、高島進は、戦後の学生セツルメントの特徴として、学生セツルメントの起源とされるイギリスのトインビー・ホールでの実践に触れ、「トインビー・ホールがブルジョア的立場からの働きかけであり、帝大セツルメントがプロレタリアートの立場に立つ努力をしたとするならば、戦後の社会はセツルメントに国民としての立場、国民運動としての基礎を与えた」(高島, 1968, p.29) として、戦前・戦後の学生の立ち位置の違いについて述べている。さらに、高島は、「学生セツルメントの活動の特色は、地域住民の立場に立って、『同じ喜びと悲しみの中に』、その悩みを解決しようと努力するとき、『地域でぶつかるとんな小さなことでも、なぜ、どうしてそうなのかを掘り下げる』姿勢である。それはトインビー・ホールがしたように、問題を個人あるいは

個々の家庭の偶然の特殊なものとして現象だけを追うのではなく社会の問題として深めるといふ科学的な観点であり、それを日本全体の社会の動きと結びつけられるセツラーになることが強調される」(高島, 1968, p.33)として、戦後の学生セツルメントにおける地域住民と同じ立場に立って科学的な問題解決を志向する姿勢について言及した。

戦後の社会事業研究者である西内潔は、専門的な社会福祉事業と学生セツルメントを比較し、「前者は常に顧慮と細心と慎重とのうちに、種々なる社会的関係を考慮して経営されるが、後者は、この点は実に自由で、学生セツラーは社会的思惑や神経質を顧慮せず、行動するに当って、良心と理知との命に従うか否かが、基本点のようである。もちろん、数々の問題が内在しているが、しかし、彼等は、この点において、かなり自由に、自己の思索と実験に向って勇敢に精進し、セツルメントを社会的実験室としている」(西内, 1959, p.84-85)と、戦後の学生セツルメントの特徴を述べた。さらに、西内は、セツラーがしばしば感じる何のために自分はこんなことをしているのだろうかといった懐疑についても取り上げ、「この懐疑は、自己反省の動機であり、ヒューマンイズムの基礎を固むるものであり、民主主義的活躍の跳躍台ともなる」(西内, 1959, p.104)として、活動中におけるセツラー自身の迷いや悩みを通じた主体形成のあり方についても言及した。

以上、戦前・戦後の学生セツルメントに関する1950-60年代の研究を概観した。この時期の研究では、大学拡張の理念や労働者・地域住民と共に科学的な問題解決を志向する姿勢など、戦前から引き継がれた学生セツルメントの原理がおさえられるとともに、戦後の学生セツルメントの特徴として、「積極的行動、創造的側面」「社会的実験室」としての性格が注目されていた。ここで特筆すべきは、戦後の学生セツルメントに関する1950-60年代の研究において、既に学生の学びに関する言及があったということである。そこでは、第一に、現在のサーベラーニングに通ずる大学拡張の理念に基づいた理論と実践の往還を通じた学びについて、第二に、戦後の移り変わる社会の中で活動の意味の喪失や困難に直面しながら、自分は何をすべきかということについて悩み、葛藤し、自己を形成していたという学びの側面が見出されていた。

こうした学生セツルメントに関する研究は、2010年代以降、再び注目されることとなる。それでは、2010年代以降、学生セツルメントは、どのような観点から再評価されてきたのであろうか。

3-2. 学生セツルメントに関する2010年代以降の研究—学生運動・社会福祉運動・大学とボランティアと

いう研究視座

学生セツルメント研究の現代的意義として、社会教育学者である山田正行は「現代において細分化専門化した各実践を総合的に捉える」「(衰退していった学生セツルメントに)相応しい評価を与える(括弧内筆者)」「学生運動の新たな側面を明らかにできる」(山田, 2015, p.2)といった点を挙げている。また、学生セツルメントの研究者である岡本周佳は、その意義として「戦後の社会福祉および社会福祉運動の展開の一面を示すとともに、地域の自治・住民の主体形成の観点からも意義がある」「ボランティア活動や学生の活動のあり方とともに大学教育のあり方の議論とも関連する」(岡本, 2020, p.1)と述べている。本稿でレビューの対象とした学生セツルメントに関する研究においても、山田が述べたような、①学生運動としての意義、岡本が述べたような、②社会福祉運動としての意義、③ボランティア活動および大学教育のあり方に関する視点、という3つの視座に整理することができる。

まず、①学生セツルメントの学生運動としての意義について、山田は「帝大セツルメントでは天皇制からマルクス主義、共産主義者まで様々な思想や実践が合流し、混在していた」(山田, 2012, p.37)と分析した上で、『だれが風を見たでしょう—ボランティアの原点・東大セツルメント物語』(宮田, 1995)の記述から、宮田は残酷な弾圧により精神障害を被ったセツラーがいたということ伝えたかったのではないかと考察した(山田, 2012)。さらに、山田は、亀有セツルメントに残された文献調査から、戦前の学生セツルメントは全体主義や軍国主義の弾圧によって消滅させられてしまったが、戦後の学生セツルメントにもその批判的精神は受け継がれていたと分析する(山田, 2015)。また、岡本は、学生セツルメントの運動性が1970年代以降に薄れていったことについて「さまざまな法制度などの整備がなされる中で、一定の役割を終えた」(岡本, 2020, p.228)ものと捉えており、「さまざまな社会の困難があらわれてくる現実として地域を捉える」(岡本, 2020, p.228)視点に学生セツルメントの運動的意義を見出している。

次に、②社会福祉運動のあり方に関する考察として、岡本は、学生セツルメントの性質の変化について、労働運動(戦前～1950年代後半)から専門的な活動へと変遷し、1960年代以降、専門的な活動が難しくなり、地域住民とともに身近な課題に取り組むようになったと分析した。さらに、学生セツルメントにおいて実践記録という現代のソーシャルワークの方法論に通ずる方法が取られていた点を注目すべき点として挙げている(岡本, 2020, p.228)。また、大学史研究を専門とする赤司友徳は、戦後の九州大

学セツルメントの再建からセツルメント・ハウス建設までの診療部の活動について、九州大学セツルメントが学生サークル的活動の行き詰まりから社会法人格を取得した結果、学生たちが期待する運動形態から離れてしまったと考察している（赤司，2020）。

最後に、③ボランティア活動および大学教育のあり方に関する考察として、岡本は、当時のセツラーが残した文章や聞き取り調査から、多くのセツラーが当時の経験を肯定的に捉えている一方で、他方では、当時の経験について多くを語らないセツラーや、長年、葛藤を抱えているセツラーがいることを指摘している（岡本，2020，p.217）。しかし、岡本は、そうした悩みや葛藤は活動に真剣に向き合い、自身のあり方を問い直した結果として生まれたものであり、「セツルメントを卒業したとしても、辞めたとしても、通過していった者にとって、それは自己教育の意味を十分にもつものなのではないだろうか」（岡本，2020，p.218）と考察している。

また、学生セツルメントを大学における地域貢献のあり方といった観点から考察した論文としては、中村みどり、黒岩亮子の研究がある。中村は、セツラーの回想記録において、当時の活動がその後のセツラーの専門的な職業人生に不可欠なものであったと肯定的に語られていることを指摘し、「学生が様々な社会的課題を抱えた人々に触れ、学問研究を通じて問題を科学的に理解する力を養い、社会形成に寄与すべく学びと活動を自立的に形成していくこと」（中村，2014，p.51）を大学教育の中に位置づけるべきだと述べた。黒岩は、日本女子大学セツルメントの設立から足立区の委託事業として学童保育を実施するに至るまでの分析を通して、大学セツルメントが地域に果たした役割について考察した。黒岩は、日本女子大学セツルメントが「住民の主体性の醸成による地域改良という点において、一定の成果を収めた」（黒岩，2015，p.66）としつつも、委託事業としての学童保育を実施するようになった後、住民の主体性を意識した「地域改良」よりも「地域貢献」という言葉が使われてきたことを挙げ、住民や学生の主体性をどのように発揮させるのかという観点から、当時の活動に学ぶ点が多いのではないかと述べている（黒岩，2015，p.66-67）。

さらに、世代間交流の研究を進める佐々木剛・草野篤子は、文献調査を通して、学生と地域社会における相互互惠性について分析している。佐々木・草野は、この分析を通して、近年の災害ボランティア活動においても、学生と地域社会における相互互惠性が見出される可能性があるかと考察している（佐々木・草野，2018）。

以上、学生セツルメントに関する2010年代以降の先行研究を概観したが、1950-60年代の先行研究

と比べると、学生セツルメントにおける学生運動としての意義や社会福祉運動としての意義を述べた論文よりも、ボランティア活動における学びや教育的意義について論じたものの割合が増加していた。こうした背景には、2010年代以降、高等教育における学びの見直しや教育におけるボランティア活動への期待の高まりを受け、改めて、学生セツルメントを再評価しようとする流れがあったと考えられよう。また、先行研究において、多くのセツラーが、当時の経験を肯定的に捉えていたことが示されていたように、たしかに、学生セツルメントの教育的意義は大きかったものだと考えられる。しかし、岡本が、当時の経験について多くを語らないセツラーや、長年、葛藤を抱えているセツラーがいることを指摘したように、記録に残された文献から読み取れる情報は一部に過ぎず、今後、ボランティア活動における学びについて探究を進める上で、そこでの学びのプロセスについてより詳細な分析を行なっていく必要がある。

岡本によれば、2019年の時点でセツルメントという名称を引き継ぎ活動している学生団体は10に満たない（岡本，2020，p.191）。しかし、セツルメントという名を使わずとも、学生セツルメントの基本原理であった、地域および社会の課題について頭で考えるだけでなく、実際の地域における活動と交流を通して掴んでいこうとする活動理念、および、セツラー自身が批判的思考を持ちながら活動を行い、学びを深めていくことの重要性、すなわち、学生自身が、地域活動を通して、自分はどんなことに興味があり、どんなことを学びたいのか、どんな生き方をしたいのか、ということについて、様々な悩みや葛藤を伴いながら意識化していくプロセスを重視するといった活動理念は、現在、実施されているボランティア活動にも通ずる部分があるのではないだろうか。実は、ワークキャンプの先行研究においても、これらの視点は重視されてきた⁷⁾。次に、ワークキャンプに関する研究を概観していく。

4. ワークキャンプに関する研究

本稿でレビューの対象としたワークキャンプに関する研究は、①公共圏・親密圏あるいは贈与論といった社会学の概念を用いてワークキャンプの意義を分析した研究、②プログラムの分析を通してそこの学びのプロセスについて考察した研究、③ワークキャンプを支援する方法およびその仕組みについて論じた研究、④量的研究の手法を用いて学習効果を測定した研究に整理することができる。以下、それぞれの先行研究を順に取り上げていく。

4.1. ワークキャンプに関する社会学的アプローチからの研究

—ワークキャンプにおける親密圏の生成と公共圏への接続条件

ワークキャンプの初の学術的な理論書とされる『承認欲望の社会変革—ワークキャンプにみる若者の連帯技法』（西尾・日下・山口，2015）では、「ワークキャンプは、どのような条件の下であれば、親密圏としてキャンパーの承認を満たすと同時に、公共圏へと働きかけて社会変革の基盤ともなりうるのだろうか」（西尾・日下・山口，2015，p.12）という問いが立てられている。まず、第一章において、社会運動論の研究者である西尾雄志は、ワークキャンプの特異性として、ワーク（労働）だけではなく、キャンプ（共同生活）に力点を置き、そこから生み出される親密性にこだわる点を挙げ、この行為を『外部/他人事の社会問題/公的問題』を、『内部/日常的な人間関係/親密圏に取り込む』行為』（西尾，2015a，p.30）と捉えた。さらに、西尾は「公と私の円環」（西尾，2015a，p.31）を促進することがコーディネーターの役割だと述べている。

さらに、西尾は、贈与論の概念からもワークキャンプを分析し、学生ボランティアにおける知識不足や経済力のなさなどの劣位性が、贈与によって生ずる支配—服従関係の関係をずらし、変容させるとして、その特性について考察している（西尾，2015a，p.35-38）。また、シンボリック相互行為論、共生社会論の研究者である山口健一も、贈与論の概念を用いてワークキャンプを分析している。山口は、贈与によって生じる非対称的な関係についてキャンパーたちがどのようにして解決を試みたのか、あるいは、そこにはどのような葛藤が生まれていたのか、といった観点からワークキャンプを分析し、その意義（「ボランティア活動」との差異）と課題について考察している（山口，2016，2020）。

第二章において、政治学者の日下渉は、1960年代から1970年代初頭におけるFIWC関西委員会の機関紙やインタビューから、『『根拠地』からの社会変革』（日下，2015a，p.46）というビジョンの現代的意義について考察した。日下は、「ワークキャンプの思想と実践は、安保闘争を経験した世代が、クェーカーの平和主義の伝統に、谷川雁の『原点』や鶴見俊輔の『根拠地』といった思想を持ち込むことで形成された」（日下，2015a，p.57）と分析し、「ワークキャンプは、生き苦しさを抱え『現代的不幸』に悩んだ若者と、貧困、障がい、病いといった『近代的不幸』を背負った者たちが邂逅する根拠地を生み出した。そこでキャンパーは、他者との関わりのなかで自己確認を求めながらも、他者と親密な関係を築こうとしては断絶にぶち当たり、衝突し、葛藤

と矛盾のなかで得た痛みと傷を現状変革のための力に変えていこうとした」（日下，2015a，p.72）と考察した。

第三章において、西尾は、中国のハンセン病快復村でのワークキャンプに参加した学生が、当初は、〈ハンセン病元患者〉としか見えていなかった人々のことを、徐々に〈村人〉〈じいちゃん〉〈リャンさん〉と変化させていった例や、「教科書はハンセン病の特殊さを教えてくれたが、普通さは教えてくれなかった」（西尾，2015b，p.94）という学生の発言を例に、アルベルト・メルッチの支配的な「文化コード」への抵抗としての「名づけの力」（Melucci，1996）を援用し、『『病い』の意味を規定する『文化コード』への抵抗としてワークキャンプを捉えることが可能』（西尾，2015b，p.94）と、ワークキャンプが形成する親密圏の可能性について言及している。

第四章において、日下は、フィリピンにおけるワークキャンプの分析を通して、キャンパーと現地の人々の、弱さや不幸を接点とする共同性から生ずる社会変革のプロセスについて考察した。日下は、そのワークキャンプについて、「秩序づけられた日常生活から離脱し、再び日常に統合されるまでの移行期に経験される一種の祝祭である。私たちは日常生活では様々な分類され序列的に扱われるが、キャンプでは掛け替えのない『私』として立ち現れ、他者から扱われる。そこでは、国籍、性別、病い、階層、学歴、職業、地位など、日常生活を秩序づけていた様々な分類と序列が曖昧化し、キャンパーも現地の人びとも解放されていく」（日下，2015b，p.118）と述べ、ワークキャンプを触媒に現地の人々の主体的な参加が促進される可能性を示した（日下，2015b，p.122）。

第五章において、山口は、唐桑町での震災復興キャンプの展開過程におけるキャンパーたちの語りや行動から、唐桑キャンプという意味世界について〈つながり〉をキーワードに考察した。山口は、『『〈つながり〉の多元性』を有する唐桑キャンプでは、個々のキャンパーがそれぞれ異なる〈つながり〉を有しており、また形成していた』（山口，2015a，p.164）として、唐桑キャンプを「多元的に形成・展開される『〈つながり〉を通じた現地の人びとのエンパワーメント』を核とした意味世界」（山口，2015a，p.165）と結論づけ、ワークキャンプをそのための方法として位置づけた。

第六章において、山口は、キャンパーへのインタビューから、親密圏としての唐桑キャンプから公共性が浮上する論理を考察した。山口は、ワークキャンプが親密圏における楽しさに終始しないためには、「〈現地の人びとの意味世界との接触〉や〈つながり〉の経験に基づく多様な意見が交わされるミー

ティングや話し合いを十全に作動させ、ワークキャンプを異質な個人が呼応し多様な活動が創発する交響体にしなくてはならない」(山口, 2015b, p.199)として、ミーティングや話し合いの重要性を述べた。

最終章において、西尾は、親密圏から公共性が誘発される条件、理性的なるものの位置取り、学生キャンパーのアマチュアリズムの捉え方、国家や市場に対する対抗性について、三者それぞれの相違を確認しつつ、「ワークキャンプは、どのような条件の下であれば、親密圏としてキャンパーの承認を満たすと同時に、公共圏へと働きかけて社会変革の基盤ともなりうるのだろうか」(西尾・日下・山口, 2015, p.12)という、序章で立てた問いに対する答えとして、「承認欲望を契機として発生したエネルギーが、理性の歯止めと羅針盤を活用し、生の被傷性を原理とした連帯を形成することによって、公共的機能を果たす力を宿し、社会変革へと向かっていく」(西尾, 2015c, p.233)という答えを提示している。

西尾・日下・山口は、ワークキャンプのもつ意義や可能性について、様々な角度から考察したが、第一に、「承認欲望」という言葉にあるように、ワークキャンプが社会変革へとつながるプロセスにおいて、キャンパーの承認欲求をその根源として捉えていた。これは、学生セツルメントにおいて主張されていた、セツラー自身の要求を重視するという方針とも一部重なり合う部分がある。

第二に、日下が、当時のキャンパーの文章からキャンパーと問題当事者の根拠地における邂逅およびそこでの断絶と衝突から生まれる社会変革のエネルギーについて述べていたように(日下, 2015a)、あるいは、フィリピン・ワークキャンプにおける剥き出しの人間同士の交流から生ずる祝祭的な空間およびそこでの関係変容について述べていたように(日下, 2015b)、ワークキャンプでは、現場における労働と交流が大きな意味を持つとされてきた。これは、学生セツルメントの基本原則とされてきた、地域および社会の課題について頭で考えるだけでなく、地域における活動と交流から掴んでいこうとする活動理念とも共通する部分である。

ただし、山口が、ワークキャンプにおけるミーティングや話し合いの重要性を指摘していたように(山口, 2015b)、あるいは、学生セツルメントが科学的な問題解決を志向していたように(高島, 1968)、ワークキャンプや学生セツルメントでは、現場における労働と交流のもつ意味が重視される一方、他方では理性的な行為の必要性も述べられてきた。日下は、理性をめぐる議論について、「ワークキャンプにおける理性の果たす役割を、『自己の抑制』と『他者との媒介』に分けることが有効だろう」(日下, 2015c, p.218)と述べ、自己や自集団が暴走し、他

者を省みなくなる危険性を防ぐという役割では理性を否定しないが、「理性を偏重するコミュニケーションは、キャンパーと現地の人びとの間にもともと横たわる非対称な権力関係を助長しかねない」(日下, 2015c, p.218)として、その暴力性についても指摘している。

さらに、ワークキャンプという集団を考えたとき、この指摘はより大きな意味をもつと考えられる。なぜならば、理性を偏重するコミュニケーションは、キャンパーと現地の人々の間のみならず、キャンパー同士の間にも、非対称な権力関係を助長する恐れがあるからである。また、様々な事情により社会的に抑圧されているキャンパーにとっては、「自己の抑制」としての理性が、抑圧を内面化する道具にもなろう。ワークキャンプと他のボランティア活動の違いが、ワーク(労働)だけではなく、キャンプ(共同生活)に力点を置き、そこから生み出される親密性にこだわる点にある(西尾, 2015a)とすれば、キャンパーと現地の人々の関係はもちろんのこと、親密圏の形成過程におけるキャンパー同士の非対称な権力関係および理性のもつ暴力性にこそ向き合う必要があるのではないだろうか。次に、ワークキャンプのプログラム分析においてこれらの課題はどのように捉えられてきたのか。ワークキャンプにおける学びのプロセスに関する研究を概観していく。

4-2. ワークキャンプにおける学びのプロセスに関する研究

—異質な他者との出会いから生じる〈ゆらぎ〉の学習論

大学生を中心とした任意団体である「ESD ボランティア ぼらぼん」が国立ハンセン病療養所邑久光明園で実施するワークキャンプについて考察を重ねた松岡広路は、そのワークキャンプの特徴として、「小集団による肉体労働・共同作業・交流プログラム・リフレクションなどを通して、理性的に考えがちな自分の立ち位置、自分と他者、自分と社会の関係を、一度忘れ去ること」(松岡, 2019, p.149)を挙げる。すなわち、ワークキャンプの学習論的意義は「理性の中で囚われてきたものを解放し、新しいものを作る構えをつくる」(松岡, 2019, p.149)ことにあるという。

京都府南丹市美山町におけるワークキャンプを分析した名賀亨の論考においても、「不安や緊張が解きほぐされ、他者との関係が深まるにつれて自己解放が起こり、ワークキャンプへの主体的参加の度合いが高まってくる。こうした心理状態の時に新しい事象や考え方あるいは意見に出会うと、それらが比較的スムーズに吸収され多様な学びが生まれてくる」(名賀, 2019, p.233-234)として、キャンパー

がこれまでに身につけてきた思考や認識の型を、一旦解放することの意義について述べられている。

松岡および名賀の論考で述べられているのは、キャンパー同士あるいはキャンパーと住民が、これまでに身につけてきた思考や認識の型を一旦解放することで、相互交流を活性化し、新たな思考や認識の型を生み出そうとする学びのプロセスである。しかし、思考や認識の型が解放された状態にあるというのは、これまでにキャンパーが身につけてきた固定観念を批判的に省察しうる機会であると同時に、そこで得た気づきを無批判に受け入れやすい状態であるともいえる。両者の論考では、この問題について直接的には触れられていないが、松岡の論考において「心理的・理性的に事態を整理し、自分たちと相手の立場の相違を冷静に考えることのできる場」(松岡, 2019, p.151)が、相互交流を生み出す構成要素の一つとして位置づけられていたように、あるいは、名賀の論考において、ワークキャンプの二つの学びの場として、実践現場という非日常的な学びの場と、準備段階などを含む実践現場外の学びの場が挙げられていたように(名賀, 2019, p.236-238)、ワークキャンプ内外に批判的省察の機会を含む学びの機会が配置されていること、そして、それらの設計・準備段階からキャンパーが関わることのできる環境が整えられていることが、ワークキャンプにおける学びを支援していく上で重要な点だと考えられよう。

次に、こうした学びのプロセスがワークキャンプのプログラムとして、具体的にどのように構造化されているのかを先行研究から整理する。松岡は、ワークキャンプにおける異質な他者同士の相互交流が生起するプロセスとして、「①個と仲間の関係変容のダイナミズムが生まれる場」「②他の仲間との接触の場」「③衝突の生まれる場」「④葛藤を許容する場」「⑤調和のプロセスが生まれる場」(松岡, 2019, p.150-151)という5つの場の連動からなる相互交流モデルを提示した。さらに、松岡は、この「仲間・接触・衝突・葛藤・調和」(松岡, 2019, p.151)からなるサイクルについて、「サイクルの周期や周回数は、実践の当事者(スタッフ・参加者・異質な他者など)の心身の状況やワークキャンプ以外のプログラムとの接触状況による」(松岡, 2019, p.151)として、必ずしも、このサイクルが1回のプログラム内で完結する必要はなく、広い視野で周期や周回数について捉えていく必要があると述べた。

名賀は、ワークキャンプにおける学びの意義として、当事者とともに働き、時間をともにすることで、キャンパー自身が当事者に近づいていくことを挙げており(名賀, 2014)、こうしたワークキャンプにおける他者との相互作用を生み出す仕掛けを、①導

入、②ワーク、③交流、④リフレッシュ、⑤リフレクション、⑥クロージング、⑦ワークキャンププログラムの非日常性、⑧その他(ワークキャンプの当日運営に直接関わってもらうための係などの仕掛けなど)の8つに整理している(名賀, 2016, p.35-38)。

また、NGOである「サルボダヤシュラマダーナ運動(Lanka Jathika Sarvodaya Shramadana Sangamaya)」がスリランカで実施するワークキャンプを分析した古橋敬一は、村人と取り組む道路整備の「共同作業」と寺院の境内や村の広場を利用して通例1日に3回開かれる「家族集会」、その他にも、一緒にとる食事、休憩、意見交換会などの活動が組み合わされることで、村の自立がリズムよく支援されていると分析した。さらに、古橋は、ワークキャンプを「関係を再構築するための『ごっこの世界』」(古橋, 2004, p.115)として捉え、非日常体験の中で失敗と成功を通した学びを獲得していくことが、これからのまちづくりや地域づくりにおいて必要とされているのではないかと考察している。

ここまでワークキャンプにおける学びのプロセスに関する研究を概観してきた。ここでは、第一に、「共同作業」「相互交流」といった言葉で表されるようなワークキャンプを通して形成される集団の特性、第二に、「個と仲間の関係変容」「当事者に近づいていく」などの言葉で表される異質な他者との出会いを生み出すプロセス、第三に、「衝突」「葛藤」といった言葉で表される自らの価値観や考えに見直しを迫るような学びのあり方が注目されてきた。すなわち、ワークキャンプにおいては、「共同作業」「相互交流」といった集団の特性から、「個と仲間の関係変容」「当事者への接近」といった異質な他者との出会いを生み出すプロセスが生起し、ワークキャンプ参加者が、そこから、「衝突」「葛藤」といった自らの価値観や考えに見直しを迫るような学びを経験していくといったプロセスが想定されてきたといえよう。

ここで、こうした学びのあり方をワークキャンプにおける〈ゆらぎ〉の学習論として捉え、先行研究について改めて検討すると、〈ゆらぎ〉を2つの契機から生じる学びのあり方として整理することができるのではないだろうか。それは、第一に、名賀が、「不安や緊張が解きほぐされ、他者との関係が深まるにつれて自己解放が起こり、ワークキャンプへの主体的参加の度合いが高まっていく」(名賀, 2019, p.233-234)と述べたようなワークキャンプ開始時における不安や緊張といった心の〈ゆらぎ〉である。ワークキャンプにおける集団は、契約や絶対化されたルールのもとに運営されるのではなく、参加者の自発性によって運営される。したがって、そこでの振る舞いについても、必ずこうしなければならないといった型は存在しない。こうした自発性、対等性

を求める集団への戸惑い、すなわち、自分が集団内においてどう振る舞えばよいかわからないといった不安や疑問がワークキャンプ開始時における初発の〈ゆらぎ〉といえよう。

第二の〈ゆらぎ〉は、松岡が、「仲間・接触・衝突・葛藤・調和」(松岡, 2019, p.151) からなる相互交流のモデルとして示したような、ワークキャンプにおける異質な他者との出会いから生じる〈ゆらぎ〉である。松岡が、相互交流のサイクルについて、必ずしも1回のワークキャンプ内で完結するわけではないと述べていたように、ワークキャンプにおいて、仲間集団が形成され、異質な他者との出会いが生じたからといって、必ずしも、「衝突」「葛藤」が起こるわけではない。今後、ボランティア活動における参加者の学びに関する研究を進めていく上では、〈ゆらぎ〉の学習論に注目し、活動に関わる多様な当事者のおかれている状況など、ワークキャンプ内外の条件も含め、多様な〈ゆらぎ〉を生み出すための出会いの条件を探るとともに、ワークキャンプ参加者が経験している〈ゆらぎ〉の実相、また、そこでどの〈ゆらぎ〉がどのように連鎖していくことで参加者の学びとなっていくのかといったプロセスについても実証的に明らかにしていく必要がある。

4-3. ワークキャンプを支援する仕組みとその方法に関する研究

一周辺支援者・引率教員・実践者の役割と学び

次に、こうしたワークキャンプをどのようにして実施することができるのか、支援の仕組みとその方法について論じられた先行研究を概観する。名賀は、大阪ボランティア協会で実施されていた高校生ワークキャンプの分析を通して、参加者の気づきを引き出すワークキャンプの仕組みとして、プログラムの運営に参加者が主体的に関わることでできる仕組みおよび周辺支援者の役割について考察した。名賀は、高校生ワークキャンプにおける大学生のチーム員の役割について、「ワークキャンプの参加者とチーム員が“共に居ること”と“共に動くこと”を基本に、参加者に常に寄り添い揺れ動くという形でのファシリテートが、このワークキャンプの大きな特徴の一つ」(名賀, 2004, p.99-100) であり「チーム員が年齢面でも感性の面でも高校生と近い位置にすることが、面白いファシリテートにつながりやすい」(同上) として、その意義について述べている。しかし、名賀は「それは裏を返せば、ノリのままで終わってしまう危険性も併せ持っているということでもある」(名賀, 2004, p.100) として、高校生参加者と大学生のチーム員を見守る担当職員の関わりおよび大阪ボランティア協会において「アソシエーター」(名賀, 2004, p.101) と呼ばれるボランティアスタッフ

の関わりの意義についても考察している。

桃山学院大学が実施する国際ワークキャンプの展開過程を整理した林陸雄は、その課題と今後の展望について述べている。林は、2002年にバリ島でおきたテロ事件によりワークキャンプの実施を中止した際、大学もワークキャンプ実行委員会も現地のニーズに思いを馳せることができなかったことを課題に挙げ、活動初期には学生主体のボランティア活動として位置づけられていた国際ワークキャンプが、次第に教育プログラムや国際支援プログラムとしての性格を帯びており、大学はその位置づけについて整理すべきであると述べた。さらに、今後の国際ワークキャンプの維持・発展のためには、引率教員の体制を整えていかねばならないとして、大学へのいくつかの提案をおこなっている(林, 2007)。

社会福祉協議会で実施されてきたワークキャンプの歴史的経緯を整理した佐藤陽は、ワークキャンプにおける参加者の即時的変容を明らかにした先行研究を取り上げ、ワークキャンプの福祉教育実践としての有効性を示し、その評価視点として、5つの構成要件と11の視点を提示している(佐藤, 2006)。また、佐藤は、実践者自身が事業を分析し、その効果について評価し、実践方法を研鑽していくことが必要だとして、実践者がトライアングレーションアプローチを用いて実践に向き合うことを提案し、事例分析を試みた(佐藤, 2010)。さらに、佐藤は、これまでの研究から、ワークキャンプの分析枠組みとして、①ワークキャンププログラムの実践枠組み、②ワークキャンププログラムの具体的な展開方法、③ワークキャンププログラムの学習支援者の役割について整理しており、これらの分析枠組みを用いて、3市の社会福祉協議会におけるワークキャンプの事例分析を行った(佐藤, 2018)。そして、その結果として、ワークキャンプ参加者が地域共生社会を実現する主体となっていくためには、ワークキャンプ終了後に継続的な地域活動などにつながるようなコーディネーターとしての役割が必要だと考察している(佐藤, 2018)。

以上、ワークキャンプを支援する仕組みとその方法に関する研究について概観したが、先行研究で述べられていたように、ワークキャンプは「周辺支援者」「引率教員」「実践者」など、様々な人の関わりによって成り立つ実践である。今後、ワークキャンプをさらに発展させていくためには、ワークキャンプを支える仕組みとその方法について、更なる研究を進めていく必要がある。また、その際、名賀と佐藤が、それぞれ、「周辺支援者」と「実践者」の学びについて言及していたが、ボランティア活動における学びをより広い視野から捉えるには、ワークキャンプ参加者のみならず、「周辺支援者」「実践者」

に固有の学びとそれらの連関を通した総合的な学びについても分析する研究視座が求められよう。

4.4. ワークキャンプにおける学習効果を測定した研究

最後に、ワークキャンプにおける学習効果を主に量的研究の手法を用いて測定した研究を取り上げる。中学校教諭であった高野利雄は、ワークキャンプにおける中学生 27 名の自己評価の変化について、質問紙調査の結果およびリーダーが記したメモ、録音テープ、感想文、観察結果等の資料から、青少年の内的欲求に応えるプログラムのあり方を考察した。高野は、調査の結果と考察から、青少年の内的欲求に応じた福祉教育のあり方として、①児童期・青年期の心理的状況と個々のレディネスを把握しておくこと、②相互受容の体験を重視すること、③自己内省をする機会となるよう援助すること、④知的学習を支える体験学習という福祉教育についての教育観・学習観を確立すること、という 4 つの視点が必要なのではないかという仮説を示している(高野, 1981)。

一般社団法人 CIEE 国際教育交換協議会に所属する小菅洋史は、「CIEE 海外ボランティア」の 2017 年の夏期参加者 340 名のうち、質問紙の回答が得られた 165 名(ワークキャンプ参加者 129 名、ホームステイ参加者 36 名)を対象に分析を行い、「社会人基礎力」に関する 13 項目と「海外ボランティア」の効果に関する 12 項目における 5 件法の回答から、「傾聴力」「柔軟性」「計画力」といった 3 項目についてワークキャンプの方が有意に高い結果が得られたことを示した。さらに、小菅は、因子分析から、「アサーション(Assertion)」「リスクマネジメント(Risk management)」「ソリューションプランニング(Solution planning)」「エスノセントリズム(Ethnocentrism)」という 4 つの因子を抽出し、このうち「アサーション」についてワークキャンプの方が有意に高い結果が得られたと分析している(小菅, 2020)。小菅も述べているように、ワークキャンプの実施期間は様々であり、また、そこでの学びには、学習者のこれまでの経験やプログラムの構成など様々な要因が影響する。ワークキャンプにおける学習効果を測定していく上では、様々な条件を考慮しながら、複数の研究手法を組み合わせる分析が必要とされるだろう。

5. 今後の研究課題と展望

本稿では、学生セツルメントおよびワークキャンプに関する先行研究の概観を通して、ボランティア活動における参加者の学びについて、これまでにどのような主張や議論が蓄積されてきたのか整理を試みた。まず、両者に類似する学びの特徴として、①

地域および社会の課題について頭で考えるだけでなく、地域における具体的な活動や交流から掴んでいくとするプロセス、②学生自身が、地域活動を通して、自分はどうなことに関心があり、どんなことを学びたいのか、どんな生き方をしたいのか、ということについて、様々な悩みや葛藤を伴いながら意識化していくといったプロセスが重視されてきたという特徴が見出された。

本稿から言えることは、ボランティア活動には、地域課題を解決していくという社会変革へ向けた指向性と、自己と社会の関係について認識を深め、社会変革の主体となっていくという自己変革への指向性が内在しているということである。そして、そうした活動を生み出していく上では、特に、学生セツルメントで強調されていた〈批判的思考〉およびワークキャンプで重視されてきた〈相互交流〉を通した学びのプロセスが必要だと考えられる。

次に、今後の研究課題と展望を以下の三点に整理する。一点目は、戦前および戦後の学生ボランティア活動における参加者の学びが、その後の人生にどのような影響を与えたのかという観点からの分析の必要性である。2010 年代以降、学生セツルメントに関する先行研究は増加しており、山田による学生セツルメントの体験を自己分析の手法を用いて描写した研究(山田, 2010)や、岡本による戦後の学生セツルメントに関する包括的な研究(岡本, 2020)が行われている。そこでは、亀有セツルメントの資料(山田, 2012b)や大阪府立大学収蔵の資料(岡本, 2020)など、新たな資料が発見されている。しかし、1976 年の時点で全国学生セツルメント連合に加盟していたセツルメントの数は 67 にのぼるとされており(岡本, 2020)、先行研究で取り上げられている資料はその一部に過ぎない。2010 年代以降、『氷川下セツルメント史—半世紀にわたる活動の記録』(氷川下セツルメント史編纂委員会編, 2014)や、『寒川セツルメント史—千葉における戦後学生セツルメント運動』(寒川セツルメント史出版プロジェクト編, 2018)など、主に 1960-70 年代のセツラーの方々が中心となり、学生セツルメントの記録が整理されつつある。さらに、1980 年代以降の学生セツルメントの展開とそこでの学びについても詳細が明らかにされていくことで、徐々に、戦後の学生ボランティア活動における学びの実態が明らかにされていくと考えられよう。

二点目は、ボランティア活動における参加者の〈ゆらぎ〉を観点とした実証研究の必要性である。これまで、ワークキャンプに関する研究では、いくつかの学習仮説が示されてきた。しかし、例えば、「仲間・接触・衝突・葛藤・調和」(松岡, 2020, p.151)からなる相互交流モデルについても、具体的に、ど

のような経験を持ち、どのような状況におかれている学習者が、どのようなプログラムにおいて、どのような周期・周回数の相互交流のサイクルを生み出すのかまでは明らかにされておらず、今後、実証的に仮説を検証していく必要がある。また、本稿では、先行研究で述べられていた、異質な他者との出会いから生じる自らの価値観や考えの見直しを迫るような学びのあり方を〈ゆらぎ〉の学習論として捉え、整理を試みた。その結果、ボランティア活動における〈ゆらぎ〉を観点として、①多様な〈ゆらぎ〉を生み出すための出会いの条件、②ワークキャンプ参加者が経験している〈ゆらぎ〉の実相、③多様な〈ゆらぎ〉の連鎖を通じた参加者の学びのプロセスについて明らかにしていく必要性が見出された。

三点目は、ボランティア活動における学びをより長期的なものとして捉え、そのプロセスについて探究していく必要性である。岡本は、当時の学生セツルメントの経験について、長年、葛藤を抱えているセツラーがいることを指摘していた（岡本，2020，p.217）。また、ワークキャンプに関する研究において、松岡は、相互交流のサイクルの周期について、より広い視野から捉える必要性を述べていた（松岡，2020）。ボランティア活動における学びを考究していく上では、参加者の即時的変容のみならず長期的な変容過程についても視野に入れていく必要がある。さらに、ボランティア活動における学びは、参加者としての学びに限らない。今後、ワークキャンプにおける学びをより総合的に捉えていくには、「支援者」（名賀，2004）、「実践者」（佐藤，2010）としての学びも視野に入れつつ、それぞれに固有の学びとそれらの連鎖を通じた学びのあり方についても分析する研究視座が求められよう。

これらを今後の研究課題とすることで、学生セツルメントやワークキャンプにおける学びのあり方を学習論として普遍化し、さらには、ボランティア活動における新しい学びの展開および地域と学校の協働に求められる教育の原型を探究する道を拓くことになるのではないだろうか。

【注】

1) ボランティア学習の可能性を論じた松岡広路は、多様な地域・教育実践において日常的に用いられる学びを「主体的行為を含むものの、予期せぬ出会いや偶発的な出来事を含み、さらに小さな発見や感動さえも包み込むカオス」（松岡，2006，p.45）または「ボランティア活動を機軸とする学習の総体」（松岡，2010，p.162）と概念化する。しかし、ボランティア学習という概念を「ボランティア活動のもつ学びの側面、及びその学びの側面を生かして意図的な教育活動として構

成したものの総称」（長沼，2008，p.137）と、意図的な教育活動のみに限定する見方もある。本稿では、ボランティア活動における学びを、教育的意図の有無に関わらず、ボランティア活動を機軸として生まれるあらゆる学習を包括する概念として用いる。

- 2) 例えば、『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要 Vol.14』（2009）、『社会教育としてのESD—持続可能な地域をつくる』（日本社会教育学会編，2015）等において、領域を主体的に横断して学ぶボランティアへの期待が論じられている。
- 3) 学生セツルメントおよびワークキャンプをボランティア活動の源流と位置づけた文献としては『希望への力—地球市民社会の「ボランティア学」』（興梠，2003）、『ボランティアのすすめ—基礎から実践まで』（守本・河内・立石編，2005）等がある。
- 4) CiNii Articles・Dissertations を用いて「学生セツルメント」「大学セツルメント」「帝大セツルメント」「東大セツルメント」「ワークキャンプ」をタイトルに含む1951年から2020年までの論文検索を行なった結果、戦前・戦後の学生セツルメントに関する体系的な先行研究レビューが行われていたのは、「戦後学生セツルメントの展開に関する研究」（岡本，2020）のみだった。しかし、このレビューは、学生セツルメント研究における研究視座を明確にするために行われたものであり、そこでの学びに焦点をあてたものではない。また、ワークキャンプに関する先行研究についてまとめられた論文は存在しなかった。
- 5) 現在、国内外でワークキャンプを実施する団体としては、FIWC、ACTION、good!、山村塾、NICEなどの団体がある（西尾編，2009）。また、桃山学院大学など大学が主催となって実施するワークキャンプもある（林，2007）。さらに、国内のワークキャンプとしては、「京都ボランティア学習実践研究会」が京都府南丹市美山町で実施する美山ワークキャンプ（名賀，2014）、「ESDボランティア ぼらばん」が国立ハンセン病療養所邑久光明園で実施するワークキャンプ（松岡，2019）などがある。
- 6) 岡本周佳によれば、2019年時点でセツルメントという名称を引き継ぐ学生団体は10に満たないが、現在も活動を続ける大学のサークルや、診療所などのかたちで歴史を引き継ぎ活動しているという例も多く見出されるという（岡本，2020，p.191）。
- 7) 例えば、ワークキャンプに関する先行研究で

は、「祝祭の生み出す社会関係と共同性」(日下, 2015b, p.117) という観点や、学生が様々な悩みや葛藤を伴いながら主体形成を遂げていくプロセスを「根拠地からの社会変革」(日下, 2015a, p.67-71) という概念で捉えるという提起もある。

【引用・参考文献】

- Jacoby, B. (1996) Service-Learning in Today's Higher Education, in Jacoby, B. et al. Service Learning in Higher Education: Concepts and Practices, Jossey-Bass, p.3-25
- 赤司友徳 (2020) 戦後九州大学セツルメントの活動と学生意識—1950年代後半、再建期を中心に、九州文化史研究所紀要, 63, p.73-104
- アルベルト・メルッチ (1989) 山之内靖, 貴堂嘉之, 宮崎かすみ訳 (1997) 現代に生きる遊牧民—新しい公共空間の創出に向けて, 岩波書店
- 岡本周佳 (2020) 戦後学生セツルメントの展開に関する研究, 日本福祉大学大学院福祉社会開発研究科博士論文
- 北川隆吉 (1956) 学生セツルメント運動の理解と課題について, 全国社会福祉協議会編, 社会事業, 39 (12), p.11-16, 10
- 日下渉 (2015a) 「根拠地」へと下降する安保時代のもうひとつの学生運動, 西尾雄志, 日下渉, 山口健一, 承認欲望の社会変革—ワークキャンプにみる若者の連帯技法, 京都大学学術出版社, p.45-76
- 日下渉 (2015b) 「祝祭」の共同性—フィリピン・キャンプにおける素人性の潜在力, 西尾雄志, 日下渉, 山口健一, 承認欲望の社会変革—ワークキャンプにみる若者の連帯技法, 京都大学学術出版社, p.105-136
- 日下渉 (2015c) ワークキャンプの政治的潜在力, 西尾雄志, 日下渉, 山口健一, 承認欲望の社会変革—ワークキャンプにみる若者の連帯技法, 京都大学学術出版社, p.214-225
- 黒岩亮子 (2015) 大学セツルメント活動が地域に果たした役割—日本女子大学O町セツルメントの事例から, 東京社会福祉史研究, 9, p.49-71
- 興梠寛 (2003) 希望への力—地球市民社会の「ボランティア学」, 光生館
- 小菅洋史 (2020) 短期海外ボランティアによる主観的成長と「社会人基礎力」—ワークキャンプ型とホームステイ型の違いに着目して, グローバル人材育成教育研究, 8(1), p.1-11
- 佐々木剛・草野篤子 (2018) 関東大震災を契機として始まった東京帝国大学セツルメント—世代間交流の視点からの再検討と現代学生ボランティアとの関連性, 日本世代間交流学会誌, 7(1), p.33-45
- 佐藤陽 (2006) ワークキャンプの評価視点についての基本的枠組みに関する考察—ワークキャンプの歴史的経緯と調査研究に基づく有効性の検証をもとに, 十文字学園女子大学人間生活学部紀要, 4, p.153-169
- 佐藤陽 (2010) 実践者が自らの実践を問うための研究方法—福祉教育実践としてのワークキャンプから, 十文字学園女子大学人間生活学部紀要, 8, p.79-93
- 佐藤陽 (2018) 福祉教育実践プログラム「ワークキャンプ」の有用性について, 十文字学園女子大学紀要, 48 (1), p.83-97
- 寒川セツルメント史出版プロジェクト編 (2018) 寒川セツルメント史—千葉における戦後学生セツルメント運動, 本の泉社
- 高島進 (1957) 戦前における学生セツルメントの正確について—東京帝大セツルメントを中心に, 日本福祉大学研究紀要, 1, p.16-29
- 高島進 (1968) 学生セツルメントの動向, 月刊福祉, 51 (10), p.30-33.
- 高野利雄 (1982) 青少年の内的欲求に応える福祉教育—ボランティア・ワークキャンプの自己評価に対する影響をめぐって, 上智大学カウンセリング研究, 6, p.63-65
- 長沼豊 (2008) 新しいボランティア学習の創造, ミネルヴァ書房
- 名賀亨 (2004) ボランティア学習プログラムにおける支援者の役割—大阪ボランティア協会「高校生ワークキャンプ」の実践事例をとおして, 日本福祉教育・ボランティア学習学会年報, 9, p.80-105
- 名賀亨 (2014) いのちの持続性とワークキャンプ運動—いのちの持続性を観点としたワークキャンプ実践分析, 日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要, 24, p.36-44
- 名賀亨 (2016) ボランティア活動実践にある学びとプログラムの関係—ワークキャンプを事例として考える, 研究紀要, 61, p.27-40.
- 名賀亨 (2019) ワークキャンプ実践に見る福祉教育そしてボランティア学習, ボランティアセンター支援機構おおさか編, ボランティア・市民活動実践論, 岡本榮一監修, ミネルヴァ書房, p.225-242
- 西内潔 (1959) 日本学生セツルメント運動の研究, 日本セツルメント研究序説, 宗高書房, p.51-65
- 西尾雄志編 (2009) ワークキャンプ—ボランティアの源流, WAVOC
- 西尾雄志 (2015a) 公と私の円環運動—親密圏が秘める公共性, 西尾雄志, 日下渉, 山口健一, 承認欲望の社会変革—ワークキャンプにみる若者の連

- 帯技法, 京都大学学術出版社, p.19-44
- 西尾雄志 (2015b) ワークキャンプの「名づけの力」—中国キャンプの親密圏が秘める可能性, 西尾雄志, 日下渉, 山口健一, 承認欲望の社会変革—ワークキャンプにみる若者の連帯技法, 京都大学学術出版社, p.77-104
- 西尾雄志 (2015c) ワークキャンプ論のアリーナへ—執筆者3人のスタンスと論点, 西尾雄志, 日下渉, 山口健一, 承認欲望の社会変革—ワークキャンプにみる若者の連帯技法, 京都大学学術出版社, p.226-235
- 西尾雄志, 日下渉, 山口健一 (2015) 承認欲望の社会変革—ワークキャンプにみる若者の連帯技法, 京都大学学術出版社
- 日本社会教育学会編 (2015) 社会教育としてのESD—持続可能な地域をつくる (日本の社会教育第59集), 東洋館出版社
- 日本福祉教育・ボランティア学習学会 (2009) 日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要 (14)
- 林陸雄 (2007) 桃山学院大学における国際ワークキャンプの課題と展望, 桃山学院大学キリスト教論集 (43), p.43-69
- 氷川下セツルメント史編纂委員会編 (2014) 氷川下セツルメント史—半世紀にわたる活動の記録, 株式会社エイデル研究所
- 古橋敬一 (2004) スリランカにおけるサルボダヤ運動とその地域開発の手法—ワークキャンプの可能性と意義を求めて, 経済経営論集, 7, p.103-117
- 松岡広路 (2006) 生涯学習論の探究—交流・解放・ネットワーク, 学文社
- 松岡広路 (2010) ボランティア学習, 柴田謙治, 原田正樹, 名賀亨編, ボランティア論—「広がり」から「深まり」へ, みらい, p.161-179
- 松岡広路 (2019) 持続可能な共生社会の創造に資するボランティア実践の意義と課題—〈いのちの持続性〉を問う価値枠に着目して, ボランティアセンター支援機構おおさか編, ボランティア・市民活動実践論, 岡本榮一監修, ミネルヴァ書房, p.141-156
- 宮田親平 (1995) だれが風を見たでしょう—ボランティアの原点・東大セツルメント物語, 文芸春秋
- 守本友美, 河内昌彦, 立石宏昭編 (2005) ボランティアのすすめ—基礎から実践まで, 岡本榮一監修, ミネルヴァ書房
- 山口健一 (2015a) 〈つながり〉の現地変革としてのワークキャンプ—東日本大震災における唐桑キャンプの経緯と意味世界, 西尾雄志, 日下渉, 山口健一, 承認欲望の社会変革—ワークキャンプにみる若者の連帯技法, 京都大学学術出版社, p.137-168
- 山口健一 (2015b) ワークキャンプにおける〈公共的な親密圏〉生成—唐桑キャンプにおける若者ボランティア活動の意義と危険性, 承認欲望の社会変革—ワークキャンプにみる若者の連帯技法, 京都大学学術出版社, p.169-202
- 山口健一 (2016) 社会理論と事例研究の間で「生の技法を分析する」—「ボランティア」とワークキャンプ, 都市経営, 9, p.35-51
- 山口健一 (2020) 災害ワークキャンプが作ったもの—住民からみた「唐桑キャンプ」, 都市経営, 12, p.99-115
- 山田正行 (2010) アイデンティティと時代—一九七〇年代の東大・セツルの体験から, 同時代社
- 山田正行 (2012a) 帝大セツルメントに関する一考察, 社会教育学研究, 24, p.30-46
- 山田正行 (2012b) 亀有セツルメントの創生期—帝大セツルメントから東大セツルメントへの歴史において, 社会教育学研究, 25, p.34-102
- 山田正行 (2015) 学生セツルメントに関する資料を読むために, 社会教育学研究, 35, p.1-16